

「地域とむすぶミュージアム活動の試み」

開催日：2004年11月26日 於：宇治市宇治公民館

共同主催：人間学研究所共同研究プロジェクト

「学園ミュージアムを考える」

京都文教大学博物館学講座

「『（人と人をむすぶ）地域まるごとミュージアム』

構築のための研究」

橋本和也（総合司会）：

皆さんこんばんは。総合司会役をおおせつかった、京都文教大学の橋本でございます。この暗い中、ありがとうございます。まず、何人かをご紹介しますと思います。国立民族学博物館から、宇治谷先生です。よろしくお願いします。当京都文教大学の学芸員課程の非常勤の先生としても来られています。次は、今日のメインゲストの、宇治橋通り商店街の理事長の中西さんでございます。どうもありがとうございます。副理事長さんの住山さんでございます。どうもありがとうございます。次にこれからご挨拶をお願いする京都文教大学の中村先生です。やはり学芸員の博物館課程担当です。次は、永野先生でございます。そして今日のメインのスピーカー、発表をして頂きます、宇治市歴史資料館の坂本さんでございます。次に京都文教大学の現代社会学科の方から、小林先生でございます。小林先生、どうもありがとうございます。

まず、全体についてのご挨拶を、中村先生からお願いしたいと思います。

中村博幸：

失礼致します。京都文教大学の中村でございます。今日はめぐり合わせで、偉い先生方の代わりに私が挨拶することになったんですけれども。私は学芸員課程、あるいは教職、情報教育など、色んなことをやっておりまして、教育の

ほうの側の人間なので、なかなか文化人類の先生と違ってフィールドに出ていくことはあまりなくて、むしろ皆さん方のお世話になっていることをお話でお聞きしている状態です。それで、今日の主催が人間学研究所ということでご挨拶をさせて頂くわけなんですけれども、私も頭の中が混乱してきてややこしいんですが、現在関係ある3つのプロジェクトが走っているわけなんです。ひとつは、今日の主催となっております「学園ミュージアムを考える」、つまり大学博物館というのが今ブームになってきて、そういうものの視点から見ていこうという、人間学研究所のひとつのプロジェクトです。それからもうひとつは、「人と人をむすぶ地域まるごとミュージアム」という、これは科学研究費を橋本先生を中心にとって頂いて動いているプロジェクトのほうで、地域との連携を図っているわけです。そしてもうひとつが、学芸員養成課程というのがございまして、私立大学や国立大学関係のいろいろな連携があるんですけれども、その西日本の博物館学芸員養成課程の協議会というところでちょっと補助金をもらいまして、ミュージアム・ディレクター型学芸員養成というプロジェクト。そういう3つのプロジェクトが同時に走っておりまして、それぞれ微妙に分担しながら、共同部分是一緒に動いていくという、こういうややこしい状態になっております。

少し私の考えというか、今の博物館の動きを

お話させていただきますと、ひとつは、いわゆる「地域」と、あるいは「まるごと」というキーワードを言った場合に、人の問題、これが一番大事だと思います。地域、それから博物館の中だと学芸員、それから大学から見ると、大学人、いわゆる教員・学生。この3つが人の問題でうまく融合すれば、すごくうまくいくと。もうひとつは場所ですね。今までは「博物館入り」という言葉があったわけですが、そういう時代ではなくなってきました、地域と博物館、そしていわゆる大学の中のいろいろな公開、例えばさっき言いました大学博物館、これはいろんな形がございますけれども、こういうものが連携を取って、これからミュージアムという、何か日本語で「博物館」というのはあまり良い言葉じゃないというので、「ミュージアム」というものをつくっていく。こういう時代が来ているんじゃないかと。

もうちょっと偏った言い方をしますと、博物館、これは宇治谷先生や坂本さんがおられるので何か、口幅ったいですが、「保存型」という、いわゆるお蔵入りとする博物館から「展示型」、そして体験してみようという「参加型」、いわゆる市民参加型のエコミュージアムなど、そういう動きになって、参加型の博物館に変わって参りました。これはいろんな意味での参加がございます。それから展示の方法が、今まではどうも静的な、システムティックな展示だったんですが、現地展示であるということも含めて、動的な展示、動きのある展示、無形文化財をそのまま展示をしていこうというような、動きのある展示というように変わっております。

それから今までは専門家だけが博物館をやったわけなんですけれども、専門家って何なんだろうという、こういういわゆるジレンマ、見直しが入ってきました。専門家と言われる、いわゆる、我々が展示する側であった者と、ビジター、いわゆるそこへ観に来られる方ですね、参加される方、そして展示される側、まさに展示される側、エコミュージアムがそうなんですけれども、伝統的な色んなものを保存する、そ

ういう状態を見せてもらう、展示される側になる人間。こういう者が同等の立場で動いていこうと、これが今のミュージアムの動きです。

そういう意味で、展示というののもワークショップを含めた展示、まさにワークショップそのものも展示活動であって、展示以外の活動ではないと、こういう時代が来ているんだと。そのモデルとして、この地域まるごと、あるいは学園ミュージアムという、先ほどのキーワードですね、人と人をつなぐ、あるいはディレクター型、これができるんじゃないかと。

例えば具体的に言いますと、今の展示者の側で言うと、歴史資料館がある、そしていわゆる、展示される側と言うと言い方悪いですが、宇治橋通りの商店街の方々にお世話になり、そして我々の、そこへまたビジターというような形で学生、あるいは授業を通じて我々教員が参加していくと。こういうような動きになっていると思います。それで今日のお話で言いますと、これはあと司会のほうからも、具体的にご紹介があるかと思いますが、そのプロジェクトの中で学生が動いたものとして、ひとつは授業あるいは科研のほうで「うじぞー組」。もうひとつは、博物館学芸員のほうを通して「あかり工房」という動きが学生でありました。そのまとめが今日、発表されるわけです。そして全体の視野に立った動きについて、坂本さんのほうから、まとめの講演というか、基調講演みたいなのを最初に頂くと、こういうようなプログラムになっております。今日はまたこれから、始まったばかりのプロジェクトですので、中間地点みたいな形で発表して頂いて、あと、後半色々討論して頂いて、今後の活動の参考にできればと思っております。本当にお忙しいところありがとうございました。

橋本：

はい、どうもありがとうございました。では、宇治市歴史資料館の坂本さんからご発表頂きます。タイトルは、「地域・大学・資料館」です。坂本さんには、2003年から、「地域まるごとミュージアム」のプロジェクトにずっとご

参加頂いております。その内容について、具体的にどんなことをしているかについてのお話があると思いますが、2003年のプロジェクトが始まる前に、2002年に私どもが、歴史資料館の、今、館長になられています吉水さんに、宇治上神社および平等院が世界文化遺産に登録されるまでの経緯について、フィールドワーク実習の一環として学生を連れて、講義を受けたというのが、まず最初のきっかけでございます。そして、この「まるごとミュージアム」の企画を考えた時に、ぜひとも宇治市歴史資料館と共同で何か出来ないかというふうに考えてお話をしに行ったのが最初で、それ以来のおつきあいでございます。どうぞよろしくお願い致します。

坂本博司：

あらためまして、宇治市歴史資料館の坂本でございます。よろしくお願いします。時間が40～50分と聞いておりますが、オーバーしたらごめんなさい。

歴史資料館と紹介して頂きましたが、資料館は文化センターの中でございます。今年で20年経ちました。20年間ずっと同じところで仕事をして参りました。この文教大学さんとは実習生の受け入れを通して、博物館講座のお手伝いをさせて頂いていますのと、それと何度も今お話に出てきております共同研究「地域まるごとミュージアム」、それから「学園ミュージアムを考える」共同研究プロジェクトの協力者として加えて頂いております。ここでは共同研究の一環であります宇治橋通りのまるごとフェスタを終えて、協力者の一員として、また歴史資料館の立場から、これまでの経過を交えて、プロジェクトの中間的なまとめをご報告させて頂きます。

「はじめに一資料館の20年」と書いておきましたが、このタイトルでもって実は、「学園ミュージアムを考える」研究会で発表を予定しておりました。ですが、台風で流れてしまいまして、中途半端な状態でほったらかされております（笑い）。機会がありましたら、あらためて話をさせて頂きます。先ほどから20年と申し

ておりますけども、御承知のとおり、歴史資料館というのはあまり知られておりません。でもその事業は確実にこなしておりますて、教育・普及事業、それから調査・研究事業、それぞれの成果は相当の分量になっていることは確かです。特に展覧会を通して、なるべく優品や指定品を取り上げて、市民をはじめ広く公開する。それを当初から本館は大きな目標に致しましたし、事実、実行して参りました。国宝・重文といった文化財を特別展にはほぼ必ず出展するようにしましたし、その実績が認められて、重要文化財公開承認施設という指定品の公開について特段の優遇措置を受ける、そういう立場、資格を獲得しております。手前味噌というか、自慢話のようになりますけれども、全国でも90ヶ所ほどの施設しかございません。つまり都道府県立、及び中央都市設立の施設と肩を並べるといったら大げさですけれども、そうした仲間に加えて頂いておるわけです。また、調査研究の部門では、ずいぶんと色んな情報を蓄えたという実感を持っております。本館は実は「宇治市史」つまり宇治市の歴史を編纂する、そういう仕事をきっかけに構想が立てられましたので、当初から基本的な歴史情報を持っておりました。それをベースに、展覧会を通して、実物に当たり直して、より詳細なデータを吸収、確認してきました。やはり、活字とか、印刷物などでは見ることのできない多くの成果を得ることができました。

さらに近年はもっと身近なところへの関心が高まっています。身近な場所、自分たちが経験してきた生活環境の変化、これまで歴史とか市史の範囲外に置かれていた時代の生活用品、それから写真ですね。そういう記録情報が重視されるようになってくる。わたしたちは急激な20世紀後半の開発を経験したわけですけども、カラー写真が普及する以前のモノクロームの写真も、たいへん貴重になってきています。そうしたものを拝見していると、非常に皆さん表情豊かに写っておる。数十年前の、なんていうんですかね、生き生きとした、ほのぼのとした、あるいはそこまで緊張しなくてもいいといった

様子が伝わってくるものが多いです。そうした情報も資料館では積極的に取り扱うようになって参りました。

かつて宇治市史が対象といたしました地域というのは、いわゆる宇治の古いところ、旧村・旧集落中心だったわけですが、それが資料館となりまして、事業の性格が変化する中でその地域も拡大と同時に、性質的にも変化をしていくのですが、開館当初はあまりそういうことは考えの中に含んでおりませんでした。なかなか見通せなかったことでありますけれども、市史から館へという移行に伴って、地域というものに対する考え方、これも本来的には変わらなければいけなかったという側面があったように今ごろになって思っております。そんなことを実感しかけていたところに、先ほど橋本先生のほうからお話のありました、地域まるごとミュージアムという共同研究のご提案を頂戴するわけです。今から振り返っての感想であります、ある種タイムリーだったように思ったりもします。

さて、先ほど文教大さんとは、博物館の課程を通してお付き合いがはじまったと申しましたが、本館では開館以来、博物館実習あるいは学芸員実習というものを受け入れております。これもいろいろと経緯はあるのですが、そもそも開館当初からそんな実習などを受け入れる態勢でも施設でもなかったのですが、他の地域、他の市町村にこういう歴史資料館的な施設がないということもありまして、実習を受け入れざるをえない状況になりまして、一時これが大変ふくらむんであります。そこで、だんだん抑えながら、今ではなるべく宇治市域あるいは市内在住者限定に絞ってきております。文教大さんの場合ですと、大学そのものが宇治市にありますので、実習受け入れを拒む理由がないと言えますか、正直申しまして比較的優遇させて頂いております（笑い）。と言いましても、本館の場合は文字通りの実習でして、この会場にも経験者がおりますけれども、こちらの作業をお手伝い頂きます。陳列の期間に実習が当たりますと、大体のことを我々が決めますと、もう

ほったらかしに致します。後はもう実習生にボイと任せて、雰囲気指示しまして、後は彼らのセンスと言いましょ、判断に任せっきりにしてしまいます。そうするとまあ、皆まずまずのことはこなしてくれます、大抵は。例外もあります。いや、今回は良かったですよ（笑い）。たまに、本当に困ったなあと思うこともあります。我々のところに来る学生は、たいてい歴史学とか文化財の専攻ですから質的なブレはそう大きくないわけです。ところがただちょっと違う印象を受けますのが、美術系と文教さんのような、文化人類学系です。特に美術系の人達を受け入れた時、これは最近少なくなりましたが、私が接したのは、歴史資料を全く扱ったことがないというのがありありと見える学生たちでした。そういうことを察知してしまいますと、怖くなってしまうことがあります。文教の文化人類学も比較的近いものがあります。非文学部系とでも言いましょ、そんな彼らから感じ取れます雰囲気は、どうも全体を捉える角度が違っておるということです。ピントの合わせどころもちょっと違う。おそらく十年前ですと、面食らったということもあったと思いますが、最近、これも面白いなあと当方は思っています。

文教大の橋本さんから科研費を見込んだ共同研究のお誘いを受けましたのは、先ほど仰ったように一昨年のことでした。実は後になってあらためてお話を聞くまで、全体として研究がどういう構成を取るのか、全く理解していませんでした。先生が仰ることはとにかく、資料館として何か正規の事業以外で取り組めるような仕事、また行政として予算化が難しいんだけど、取り組むことが望ましい対象、例えばまとまった資料群があつて、整理とか、共同研究に組み込んで実施できるようなことはないものか、もしそれがあれば、そしてまた申請が通れば、予算的な裏付けが得られる、ということでした。こちらの耳には、とにかくも、そういうことだけしか聞こえませんでした（笑い）。そこでまず、頭に浮かびましたのが、後で紹介します「土屋コレクション」という、良い名前を

つけておりますが、要は一個人の雑多な収集品です。ともかく、事業計画を策定しまして文章化し、橋本さんに提出しました。まさかそれが通るとは夢にも思っていませんでした。

橋本さんが計画された地域まるごとミュージアムという構想は、実はとんでもなく新鮮なものでした。既存の博物館事業には、これまでなかった発想だろうと思います。初めてまとまったお話を、これも文教大学でもたれている「学園ミュージアムを考える」研究会で伺ったんですけれども、その時は大変混乱致しました。久しぶりに頭の中で、いろんな脳細胞を使う、そういう研究会でございました。普通にこの「地域まるごとミュージアム」と言いますと、言葉だけを聞きますと、地域だから東西南北の範囲があって、まるごとだから全体で、そしてミュージアムですから、ともかく博物館的なのかと、ただそう思っていました。そう言っても何のことかよくわかりませんけれども。とにかく文字面で判断をしておりました。何のかんの言っても宇治市内で、資料館ですから、資料を整理すればいいんだと思っていたのでありますが、橋本さんの話を聞きまして頭の中がごちゃごちゃになりました。今、その時の衝撃を思い出しながら、ちょっとまとめてみますと、地域つまり特定のエリアというものにこだわりはしますけれども、肝心なのはむしろそこで活動する人と、その内容だということです。積極的に目的を持ってその場所で地元とも関わって展開されている活動と、それに様々な人が関わる、いろんな人や団体に注目する。またそれがどう関連するかといったことにはあまり強くはこだわらず、ほぼ同次元で進行しているということでもって、ひとつのまとまりとして捉える。これが言ってみれば「まるごと」というもののようです。次にミュージアムですが、ミュージアムというと私たちはすぐに器、ステージとか舞台を連想するのでありますが、必ずしもそれだけではないということです。ひとつひとつの活動や運動、行事そのものの自体、またそれから連動して、組み合わせあって開催されるもの、あるいはそれがまた結果的に関連しあって生み出さ

れた事業、これらすべてを「ミュージアム」のなかに含めるということです。それぞれが博物館と、それにプラスアルファしたイメージの中で、緩やかに組み込もう、関係し合おうというもののようにあります。どうもそういった考え方、構想であると理解を致しました。

地域まるごとミュージアムの要点は、要はあらゆる人、様々な活動、そして場所は、どこでも、ということなのだと思います。そして目指すところは、町づくりへのかなり控えめなアドバイス、ということになるかと思うんですが、今回の宇治橋商店街のまるごとフェスタももちろん、この一環でありますし、あかり展やうじぞー展も、個別でもあり、かつリンクするひとつひとつのコンテンツと言うのかな、事柄としてもこれまた同様であって、我々の取組つまり土屋コレクションの調査・整理・研究も大きなひとつの柱であるということでもあります。

一見、荒唐無稽のように見えますこの地域まるごとミュージアムであります。我々歴史資料館は、これによって通常ならばまず散逸してしまうであろう個人のコレクションと向き合う機会を与えられます。実はこれに関して、このコレクションの整理に関しては、そう積極的に乗り気であったわけでは、そもそもございません。なぜかと言いますと、地域の資料館といいますのは、やはりその地域特有の歴史資料に重点を置きます。土屋さんのような偶然宇治に住まいした、そしてまあいろんなものを集められたわけですが、はっきり言えば物好きな収集家であります。その人の収集品にまで手を出すということはまず、ございません。

少し土屋さんについてお話ししますと、生まれは明治の末です。明治42年でしたか。定年退職後、宇治に住まわれるわけですが、本館の開館当初から歴史講座とか歴史散策といった事業に毎回のように参加されておりました。中央公民館の鳳凰大学という老人大学がございますが、その第1期生であります。でもその方が古書とか生活用具の収集家であるということを知りましたのはそれから数年後、本館で市内の小学校

のあゆみを扱った展覧会を企画した時のことです。どこでどういう話になったのか覚えませんが、教科書をたくさんお持ちだということがわかりまして、使い古された多くの教科書を拝借しました。陳列もしましたし、普通に手に取ってもいいよと仰って頂きましたので、オープンのコーナーを初めて設けました。それが彼の膨大なコレクションのほんの一部だったことは後から知るところとなります。おそらく最初は自分の部屋に置かletたいたのでしようのが、それが増えてきて収まりきらなくなつて、さらにいろんなものを集めだして、そしてとうとう入りきらなくなつたものだから、自分の家の近くの空き家一軒まるごとを、買っちゃうわけですね。それが、物の置き場所になります。一戸建ての民家が資料館の収蔵庫のようになってしまひます。所蔵品はその後もどんどん増えます。彼なりの方式でそれを整理します。実にまめな人です。2階などは人一人が通れるぐらい、やっとのスペースを残して、ぎっしりと物が積み込まれました。なかでも特徴的なのは、江戸時代の和本、教科書などです。好事家という言い方がありますが、はっきり言えば、一般の人から見ればちょっと変なおじいちゃんですよ。でも、思わぬところにそういう方がおられるわけです。

最近、これを整理しておりまして、彼が集め出した動機がちょっとだけわかりました。わかつたといふよりも、彼自身が語るところによりますと、はじまりは家族に関する問題だといふのです。彼は、自分の奥さんと子どもがだんだん言う事を聞かなくなつていったことを、とても残念に思つたのです。彼は、自分の親の姿、親夫婦の姿、従順な妻、生真面目に働く父親、そんな姿こそやはり理想だと確信していたわけです。ご自身も本当にまじめな息子さんだつたのだと思います。でも、自分が親になると、そうはならなかつた。

これを変える手立てはもうないと判断しました。でも、その理想を捨て去るわけにはいきません。そこで模範を示したかつての教科書を集めることで、自分の理想郷を頭に思い浮かべよ

うとしたといふのです。彼なりにまとめた動機はこうです。でも、とうていそれだけでは、あれだけの集まりません。筆まめだつた土屋さんの作品をとおして考える必要があろうかと思つています。

本当に大量に集まつた古物、土屋さんが亡くなられて、ご家族はその遺品の散逸を危惧されて、これを資料館に預ける意思をもっておられることを、人づてに聞いておりました。だけど、先ほど申しましたように、こうしたコレクションに我々は即、動きません。当然二の足を踏んでいたわけです。それとためらつていたのにはもうひとつ理由がございまして、実はもう資料館に大量の物を受け入れるスペースがないわけです。入らないんです。民家1軒分は無理です（笑い）。でも結局受け入れる羽目になるんですが、そうなつた場合、私は始めから、これは源氏物語ミュージアムへ入れる、といふことは決めておりました。あそこはまだ入ります（笑い）。といつても、農機具などは入れてません。入っているのは和本だけです。整理作業も、実は源氏でやっております。今日もそのスタッフ2名来ておりますけども。和本はまだそれでいいわけです。問題はそれ以外の雑物なんです。我々が言うところの民具であります。これが問題です。実はまだ一部を残しております。ただ2階に置かれております大量の行灯、これがともかくわりとまとまつておるから何とかせねばいかんだろうと思ひまして、それを文教さんに引き受けて頂くことに致しました。この行灯が実は、後でお話があります、あかり展の引きがね、呼び水になるのであります。はっきり言ひまして、30点ばかり行灯があるはずですが、学生たちの実習の材料になればいいと。極端な話、壊れてもいい、それでも役割は十分果たせると、非文学部系の文化人類系の学生たちに活用してもらえればいいと、はっきり申しまして手放したわけでありまして。言い過ぎたかな（笑い）。ところが意外や意外、これを学生たちはとても丁寧に扱つてくれて、さらにミニ行灯など自分たちのオリジナルグッズを考え出しまして、いわゆるワークショップを展開する

に至るわけです。これもはっきり言いましてびっくりしました。いい意味で。この後にその実践した学生の話がありますが、これからも楽しみにしております。言っておきますが、あの行灯はどのようにして頂いても結構でございます。

地域まるごととはほぼ同様の発想でもって、先ほども中村先生のほうから話がありましたが、学園つまり大学という場所に焦点を絞った取組が並行して行われております。ここでは、最近の博物館を取り巻く状況、例えば指定管理者制度の問題であるとか、全国的に今日ごく普通の存在となって参りました大学博物館にも強い関心を払いながら研究会が持たれています。それらの参考を前提にし、具体的に何をどのようにということは、全くもってまだ文教大学の場合は考えておられないのですが、まだゼロの状態なのですが、新しいスタイルのミュージアムを作り出そうとしておられるわけです。やはり博物館の立場にいる人間からすると、まずはじまりはコレクションとすぐ思ってしまう。例えば、京都文教大学の場合ですと、ご承知の通り、家政学園（現：京都文教学園）を母体としておりますので、もちろんその前身は含むわけです。そういう意味では、基礎体力がしっかりしておる。従って今後、思いのほか面白い展開を見せる可能性はあると、私自身は考えています。この研究を通しまして、つまりここで何か新しい形のミュージアムを立ち上げようとしているわけで、それは同時にそうしたミュージアム、これは先ほどのまるごとミュージアムの概念が背景にある意味でのミュージアムであることは当然です。いわゆる「博物館」を置き換えただけではなくて、そうしたミュージアムにはやはり相応しい、それなりの学芸員が求められることもまた確かです。少なくともそうした可能性を模索する必要があるだろうし、そうすれば具体的にどういうことができる人でなければいけないのか、またそういう人たちを育てるためにはどういうカリキュラムが必要なのか。もちろん現状のままで充足されるのであればそれはそれでいいんですが、他にどんな手立てが必要

になってくるのか、そういうことを考えていくことがやがては出てくると思います。ただ、これについて明確なイメージと見通しを、私は持っておりません。印象を申しますと、これまではあくまで学芸員と博物館、学芸員と言いますとあくまで博物館とその所蔵品という関係が通常基礎に置かれていました。それは至極当たり前のことでして、それが間違っているとは思っておりません。基本的なありようというのはそういうことだと思っております。ただ現実的に動いている学芸員という職や立場とも別ですし、またこの地域まるごとミュージアムの発想というのは、博物館と所蔵品、いわゆるその器と物という関係をその中心には置いておりません。でも、ここでどういうことが可能かと考えますと、やはりフィールドと言いますか、先ほども言いました「場所」、そこにあるトータルな意味での地域文化資源、あるいは地域文化資産、そしてそこに住む人々の生活そのものに当てはまっていくのだろうという感じは持っています。抽象的ですが、フィールドと物、そして人、そのなかにあって、いろんな環境を組み立てたり、組替えたりする役割を演じられるような人を思い浮かべています。経営ということともやはり、積極的にやはり絡んでいくのでしょうか。それが中心ではないにしろ、マネジメントの能力を持つことを要求されてくる。最近、マネジメント・キュレーターという言い方を時々耳にすることもあります。おそらくそういった方向で考えることが相応しいといった印象を今は持っています。どうもまだ、具体性とか現実味が乏しいのでありますけれども、またそれを本当に学芸員と呼びうるのかといった疑問もあろうかと思いますが、今のような博物館と所蔵品だけ、それだけの中にある学芸員がイメージされていないことだけは確かです。

そうした意味で、この宇治橋通りのまるごとフェスタというのはひとつの実験的な取組だったと思います。この催しについて、実行に移されるまでの経緯というのは当方は全く存じませんが、商店街の人はおそらく、こうした学生さんの力を取り入れた取組を実施されて、これま

でのような業者に任せたり、年中行事の一環としてあるお決まりのパターンのものとは全く違った達成感というか、充足感があったのではないかと思います。でもこれは今回限りではおそらくないというか、これでお終いではまずなかろうと考えます。むしろこれから何かを始めようとする、その起爆剤に過ぎない。こんなことをここで私が言うまでもなく皆さんのほうがそういう認識に立っておられるはずなんです。私のような立場、つまり歴史というものを背景に思考する者としては当然気にかかることがあります。やはりもう一度、あらためてこれまでの営みを、宇治もっと狭い意味で言えば宇治町、あるいは宇治郷なんです。そこでの営みを長い目でもって振り返る、そういうことの必要性を、あらためて強く感じました。言い方は色々ありますが、歴史を勉強するというのは、ただ単に古いものを懐かしむのではなくて、これからの現実的な課題を解決する、そのために行うのであって、問題を解決するため手段とするんだということがよく言われます。場当たり的に、ああだこうだとムードに流されながら、あの手この手を打つのではなくて、やっぱりもういっぺんしっかり自分らがどんなことをやって来たのか、ということを決り返る。それが歴史を学ぶことですし、それですから歴史を学び、発表することが重要視されるんではないかと思っています。そこで本来、こういうところではそういう話、つまり宇治の話ができればいいなと思っていたのですが、そういうことをここでいきなり話すと、唐突な感じがします。ので、今日はこういう話にしました。

でも、これに関して少しだけ、そこに「宇治橋通りの消長一名所・公園・ミュージアム」と書きましたが、いっそ極端に「宇治橋通りの終焉」としても良かったのですが（笑い）。というのは、今やっぱり宇治橋通りは、いわゆる都計道路ですよ。普通に走れば、普通に歩けば、つまり物理的に言えば、新町通りはもう宇治橋通りではない。極端に言えばですよ、本当はそんなこと思ってませんよ（笑い）。たしかに、それでも宇治橋通りはあくまでも宇治橋通

りであって、それは間違いはないですが、今もってこの商店街でこうした事業が打てるというのは、やはりそれは宇治橋通りだからだと思うのです。やっぱりここには想像以上の基礎体力と言いますか、底力を持ち続けているからできたことだと思っています。それと、言い方は少し問題あるかもしれませんが、イベント慣れ、経験の積み重ねというものがなかったら、やっぱりああしたことはなかなかできない。成立したての商店街にできる技ではない。学生の力を引き入れることについても、不慣れです。やはりこなれた、手馴れた部分をこの商店街自身が持っているというのも明らかです。検証する出発点はそこです。つまり幾度となく、大きな波を乗り越えてきた実績を明らかにして、それを明日につなげて行こうとする、そうした作業が必要だろうと思います。地域振興を促すために、歴史的背景を押さえておこうという、そういうことであります。

すると、ここでそう詳しくお話をする時間はございませんが、地域全体を見回して言いますと、この旧宇治界限というのは、開発と再開発、その頻繁な繰り返しがここで展開されている。これは確かです。今、あまりその時間軸を長く取りすぎるといけませんので、平安時代や古墳時代までは飛ばしますので、比較的その近い時代、つまり江戸時代辺りから今日までのスパンで考えますと、この宇治郷の地域の活力を生み出してきた原動力となってきたのは、そもそも一体何なのか、ということを考えてみますと、やっぱりお茶という話なんです。歴史の上ではです。やっぱり宇治茶であり、宇治茶業なんだと気づきます。この宇治茶を梃子にした宣伝やイベントが、見事にここで展開されてきた。そのプロデュースをしたのが、宇治の町、商店街の前身だったわけです。フィールドに恵まれたということは言うまでもありません。それと景色、交通の便、立地条件など、もともと名所という呼び名で、ここには特異性が付与されております。始めから、宇治は人々の注目が集まりやすく、人気があって、誰もが知っている場所であったわけです。近代になります

と、鉄道の敷設に伴って、名所も近代化されます。さらに全国的な流れでありますけれども、こういった日本全国の名所には、西洋風の公園というカテゴリーでもっての整備が進んで参ります。計画だけになったところもあります。それから、計画が途中、中途半端になったところもあります。まあ宇治はその、中途半端になったひとつの例ではありましようけれども。それから宇治町の場合には、近代の始めに電力事業にも手がける。大きな事業です。そして、日本レイヨンつまり今日のユニチカ、企業の誘致にも成功致しました。こうした恵まれた状況に先ほど申しましたお茶がベースにあるわけです。宇治茶を通して、宇治茶業を通して、ソフトの事業が継続展開されている。半世紀前まではそうでした。ところが戦後の生活様式の激変が、様相を一変させてしまいます。ここからは、いわずもがなであります、本当に我々の生活のスタイルというのはころっと変わってしまいます。最近、名所・公園をベースにしたミュージアムという新しい装いが加わりつつある。地域まるごとがそうだと思いますし、源氏物語ミュージアムというの、私は一役買っているのではないかと思います。でも、やっぱりもうちょっと気にしてみたいのが、宇治のお茶なのであります。これは全市的な問題・課題とも関わってまいります、宇治橋通り商店街としても、充分かわりのある事柄であることは確かだろうと思います。歴史を振り返りながら、事実をもとに問題を提起してみたいとも考えております。また、この点については機会がありましたら、話をまとめてみたいと思っています。

最後に、これまでまるごとミュージアムの共同研究に2年ほど関わりまして、感じておりますのは、共同研究というと難しそうなんですけれども、ストレスがとても少ないということなんです（笑い）。こういった共同研究・共同事業というのはあまり経験がありませんのですが、今回そう、しゃかりきになってやっているわけではない。でも手を抜いているかという、そうでもない。おそらくそういう点が何と

なく、いい回転をしている、回転をさせている原因ではないかと思ったりもしております。役所の仕事にかぎらず、事業には目的があって、成果をあげなければいけないということがあります。それをしかもいついつまでに、といったことが前面にあるわけなんです、そういったものがこの研究にはあまりない。誰もが気軽に、気楽に取り組めて、参加できる。でもやっていることはそれぞれみんな本気、マジだということですね。ここが大事なところなのかなと思っています。まるごとの2年を振り返りながら、雑談をして参りましたけれども、このプロジェクトには期限がございます。今、ちょうど半ばにさしかかっています。あと2年であります。あと2年経ちますと、「地域まるごと」から、「地域ひとごと」になってくる（笑い）。そして当方はお役ご免となります。でもそれまでは、今言いましたように、やっぱり、本気で、そして楽しくやっていければなあというふうに思っております。どうもご清聴ありがとうございます。

橋本：

どうもありがとうございます。ストレスをもう少しかけないといけないね、これは。

特に私の方からすれば、我々の「地域まるごとミュージアムの構築」にかかわる研究なんです、それを一度坂本さんの口から再解釈していただいたことが、すごく新鮮でございました。「あ、そうか、我々はそういうことをやっていたのか」と、かえって決意を新たにしようなところもございました。どうもありがとうございます。

次は、ストレスとかそういうのが溜まる、実際に一番「うめいている」のは誰かと言ったら、学生かなというようなところがあります。彼らにこれから発表して頂きます。まず「あかり工房展」、その次に「うじぞー組」の発表をお願いします。この学生たちの一番大きな特長は、私が関係しております、地域の個性店づくりとはちょっと違うという点です。というのは、個性店づくりは3回生のゼミで、これはオ

ブリゲーションでやっています。それに対して、こちらのほうは、自分たちのボランティアで、単位以上のことをたくさんやっているというところが全く違うところであります。ましてや、その後の「うじぞー組」も「あかり工房」も、単位とか関係なく、卒業生とか、4回生とか、そういう人達関わっている点が特徴です。授業から外れて、それでもまだこういうところの発表もしてみよう、というところで、動いている人たちであります。それがまた、ストレスとは無縁のところ動ける大きな理由だろうと。次の発表は「あかり工房」です。よろしくお願いします。

あかり工房：

それではこれから、京都文教大学・学芸員講座の有志によって行われた、あかりプロジェクトについての報告を行いたいと思います。

京都文教大学では、宇治市の個人宅に保存してあった、行灯を中心とした、あかり関係の品、約50点を学芸員講座の教材としてお借りしています。その資料を活用して、博物館展示を企画するため、私たち講座受講生の有志が集い、7月に学内で展示会を開催しました。またその展示会のアンケートで多くの要望があったワークショップを中心として、宇治橋通りまるごと文化フェスタにて、あかり工房展を開催しました。今回はこの2つの展示会、特に工房展についてのお話をします。

学芸員講座の一環として、多くの博物館を見学していた私たちは、展示会開催を企画するお話を頂き、既存の博物館にはない、私たちらしいさを出せる展示がしたいと考えました。資料である行灯を使って何ができるか、私たちらしい展示は何か、来場者に何を訴えかけられるか、様々な案が出る中、こだわった点は、来場者が何かを感じ取れる展示にしようということでした。それをもとに7月に行った「あかりの幻想展」では、学内ということもあり、学生を対象とした展示でした。それではあかりの幻想展の展示風景をお見せしますので、こちらをご覧ください。

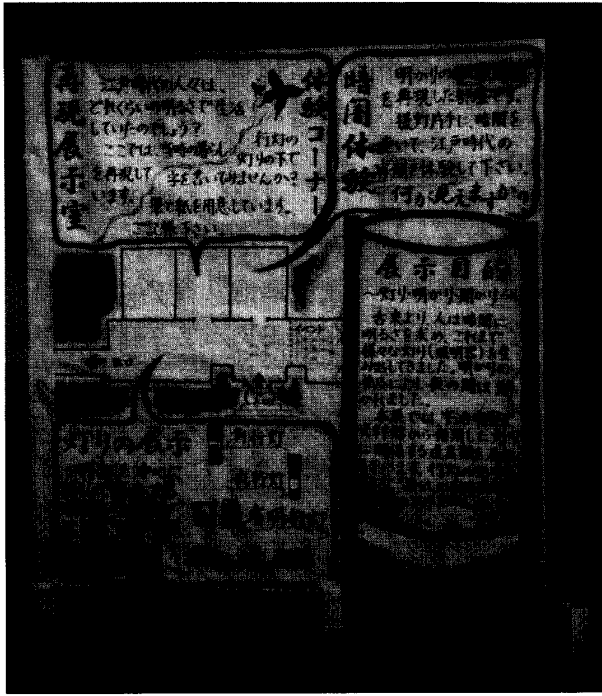
それでは、あかりの幻想展の様子を写真で紹介していきます。こちらが入口の風景になります（資料1-1）。こちらが受付の様子です（資料1-2）。こちら辺に置いてある、このちっちゃい行灯が、先ほど坂本先生が言ってらしたんですけど、私たちが考えた、手作り行灯になります。ここに置いてあるのは、文教生に実際作って頂いた行灯です。これが後の文化フェスタのワークショップで作ってもらう、手作り行灯の原型になりました。展示場内は、幻想的な雰囲気を出したかったので、薄暗くしました。そのために、入口に案内板を置くことにしました（資料1-3）。実はこれがすごい時間がかかって、なんか、私たちの中には妙に凝る人がいっぱいいるので、夜遅くまでいろいろ作業していた記憶があります。これが展示場内の様子です（資料1-4）。行灯の中に入っているのは、電池蠟燭です。行灯自体を照明として使用することで、行灯の明るさを感じてもらおうという展示でした。これは再現展示になるんですけども、



資料 1-1 あかりの幻想展会場



資料 1-2 あかりの幻想展受付風景

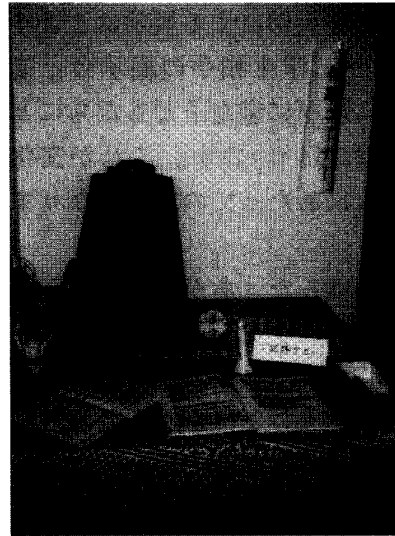
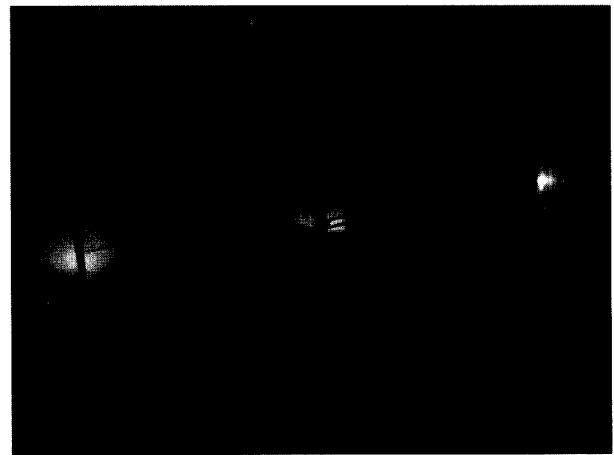


資料 1-3 あかりの幻想展会場案内図



資料 1-4 あかりの幻想展展示場内部

提灯を片手に真っ暗な部屋を歩いてもらうという、暗闇体験の場もあったんですけど、それは写真で表せなかったんで、残念なんですけど。こちらの再現展示を見て頂こうと思います。これが暗くした、実際に展示した様子です。こちらが行灯関係の道具類を展示したものです（資料1-5）。テーブルクロスには、先生がたからお借りした、インドやアフリカなど、いろんな国の布を使いました。こちらが体験コーナーなんですけど、暗い中で字を書いてもらうというコーナーです。これが実際暗くしたところなんですけれども、これぐらい暗い中で、皆苦労しながらも色々書いてくれたので、すごい嬉しかったです。安全面を考えて、展示場内の行灯

資料 1-5
行灯関係の道具類

資料 1-6 展示場内の行灯

は、電池蠟燭を使ったんですけども、この3つだけ本物の火を使っています（資料1-6）。行灯の意外な明るさに、来場者も驚いていたようですが、私たち自身もすごく驚きました。

この展示は予想以上の反応があり、平日、たった2日間の展示にもかかわらず、300人を超える来場者があり、先ほどの暗闇体験のコーナーでは、大人気で、再度挑戦される方もおられました。7月の展示会で私たちが感じたことは、展示とは来場者とのコミュニケーションなのではないかということです。暗いために、文字で説明できない部分をパンフレットや案内板で説明していたんですが、パンフレットを読んで入られる来場者は少ないために、スタッフが案内して説明していました。これが好評を得て、来場者の方から、思わぬ情報を得ることもできました。それによって、文化フェスタでは

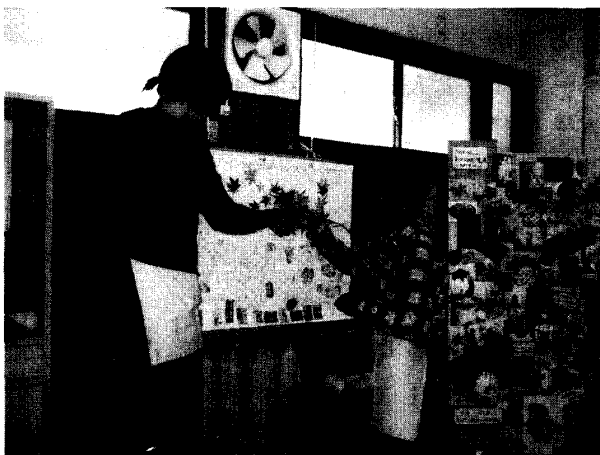
来場者との交流の場を大切にする展示にしようと考えました。しかし学生相手の展示会と違い、文化フェスタに遊びに来た子どもたちにどのように訴えかければいいのか。これが文化フェスタに参加するにあたっての課題となりました。

文化フェスタで開催した「あかり工房展」では、7月の展示会のアンケートで多くの要望があった、行灯づくりのワークショップを中心とする展示会にするということはかなり最初のほうに決まっていた。その後、もっと来場者の方に行灯に興味を持ってもらおうと、作って頂いた行灯を文化フェスタの最後に、商店街の通りに並べて灯すという案や、宇治の伝説にちなんで物語を作る、という案が出ました。行灯を商店街の通りに並べて灯すという案は、文化フェスタの実行委員会の方から出ました。始めそのお話があった時、「無理です」と私たちは即答をしてしまいました。小学生でも作れる簡単な作りで、火を灯せる安全な構造の行灯なんて、本当に、とても不可能だと思ったからです。ですが、中に火を入れて、初めて行灯の構造が理解できる、だからこそ行灯に火を入れて、通りに並べてみたいとも思いました。結局私たちは、行灯を通りに並べて火を灯すことを決定し、文化フェスタの前日まで、試行錯誤が続きました。前に並んでいる行灯は、その試行錯誤の末に生まれた行灯です。外ということもあって、宇治川から吹く風が一番の悩みどころでした。結果的には思った以上に宇治川からの

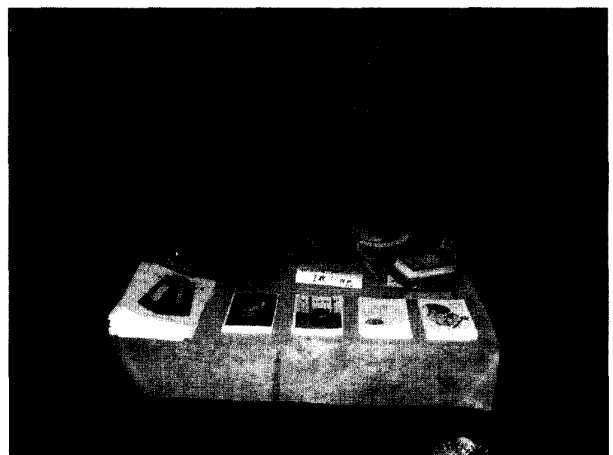
風が強くて、飛んでいってしまうので、まだまだ改良の必要性がある行灯です。それでは、あかり工房展の展示風景をスライドでまたお見せ致します。

それでは、「あかり工房展」の準備から当日の点灯風景まで、写真でご紹介します。最初にあかり工房展の展示室の準備風景です（資料1-7）。秋だったということもあって、紅葉を中心に飾り付けました。先ほどもちらっとありましたが、こだわる人が多くて、すごく飾り付けのほうに時間がかかってしまった覚えがあります。右にある賑やかなパネルは、「あかりの幻想展」の時の紹介をしたもので、写真を貼り付けてあります。これは受付の様子です（資料1-8）。ここでパンフレットや整理券などを、来てくれた方に配りました。手前に置いてあるポストカードは、グッズとして自分たちで用意したものです。実物として、土屋さんの行灯もいくつか展示しました（資料1-9）。展示コーナー全体の様子です。中央にあるテーブルの上にあるのは、宇治に伝わる伝承を参考にして、私たちが自分たちで作った物語を紙芝居風にしたものです（資料1-10）。「あかり工房展」、展示室の入口の様子です。入口には、前に置いてある、ペットボトルを利用して私たちが自分で作った行灯や、パネルなどを飾り付けました（資料1-11）。次の年の学芸員課程の履修生も、大勢見に来てくれました。参考になればいいなと思います。

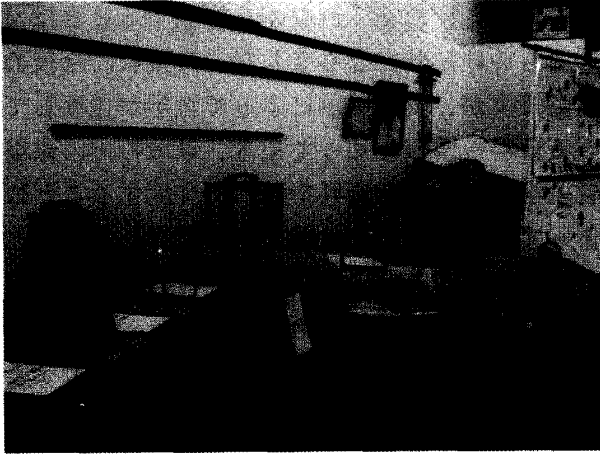
では、ワークショップの様子に移ります。た



資料 1-7 あかり工房展準備風景



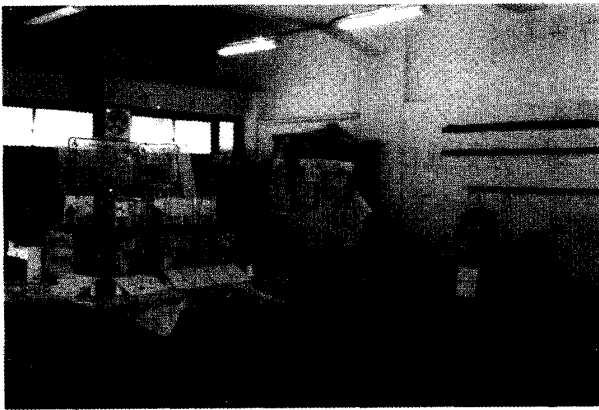
資料 1-8 あかり工房展受付風景



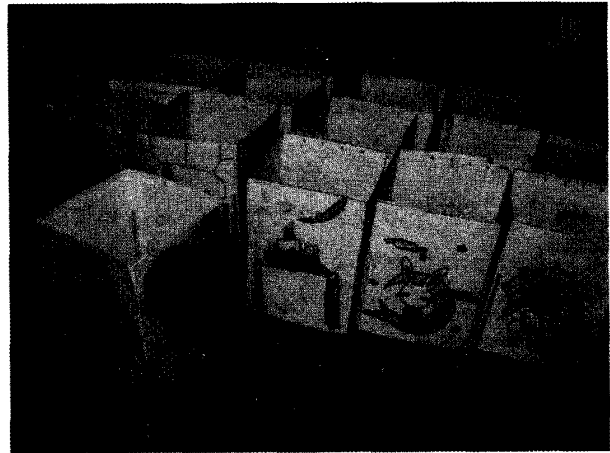
資料 1-9 土屋コレクションの行灯展示風景



資料 1-12 あかり工房ワークショップの様子



資料 1-10 あかり工房展全体風景



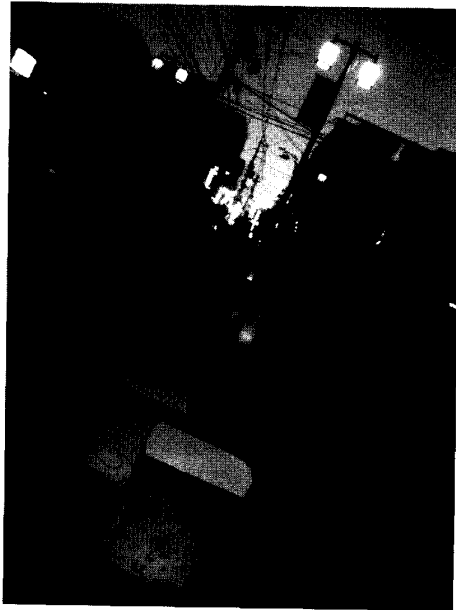
資料 1-13 子どもたちの手による行灯



資料 1-11 あかり工房展入口風景

くさんの子供達が行灯を作りに来てくれました（資料1-12）。塗り絵は自由に絵が描けないので、使ってくれるかどうか心配していましたが、塗り絵のほうが実際は好評で、「塗り絵したい」と来てくれる子が多かったです。ちょっと組み立てが子どもたちには難しかったようで、もう少し簡単な構造の行灯にしたら良かったのかなあと、後で反省点となりました。これが、実際に子供達を作ってくれて、完成した作品です（資料1-13）。本当に色々な子供達がそれぞれ好きな絵を描いてくれました。こちらが、5時15分から、実際に作って頂いた行灯を宇治橋通り商店街に並べて、火を灯している様子です。火の灯った行灯が通りに並んでいます（資料1-14）。少しずつ日も暮れてきて、もうちょっと本当は暗くなればいいのになあと感じていました。割と大勢の方が見て下さり、買い物帰りの方で、たまたま通りかかった、という方も、「きれいやねえ」と足を止めて見て下さったりしました。自分が作った行灯に火が灯るのを、すごい興味津々で見てくれてる子供と、あと、その親御さんもいらっしゃいました。本当に色々な絵を皆さん、描いて下さいました。そしてギターを弾いて下さった方がいらっしゃったんですが、その方のおかげですごくいい雰囲気

たのかなあと、後で反省点となりました。これが、実際に子供達を作ってくれて、完成した作品です（資料1-13）。本当に色々な子供達がそれぞれ好きな絵を描いてくれました。こちらが、5時15分から、実際に作って頂いた行灯を宇治橋通り商店街に並べて、火を灯している様子です。火の灯った行灯が通りに並んでいます（資料1-14）。少しずつ日も暮れてきて、もうちょっと本当は暗くなればいいのになあと感じていました。割と大勢の方が見て下さり、買い物帰りの方で、たまたま通りかかった、という方も、「きれいやねえ」と足を止めて見て下さったりしました。自分が作った行灯に火が灯るのを、すごい興味津々で見てくれてる子供と、あと、その親御さんもいらっしゃいました。本当に色々な絵を皆さん、描いて下さいました。そしてギターを弾いて下さった方がいらっしゃったんですが、その方のおかげですごくいい雰囲気



資料 1-14 宇治橋通り商店街にならぶ手作り行灯

になりました。また、火が灯ってからの商店街の風景を、自分のカメラで写真におさめて下さる方もいらっしゃいました。

あかり工房展のワークショップはかなり好評で、夕方、通りに行灯を灯すイベントも成功しましたが、思わぬ誤算も多くありました。ひとつは、行灯を作った子供たちの多くが、その行灯を家に持って帰ることを希望することです。来場者のほぼ半数以上の方が行灯を持って帰り、夕方に灯す行灯の数が足りなくなっていました。夕方まで残ってくれた方も多かったのですが、それができない人も多かったのが残念でした。もうひとつは、ワークショップと行灯の展示をもっとつなげて展示することができなかったことです。行灯を作る前や後にゆっくり見学をしてもらえれば、と思っていましたが、ワークショップがあまりにも人気を浴びてしまい、会場全体がワークショップスペースになってしまいました。そのため、展示資料を見学するスペースが狭くなってしまいました。

今回、宇治の商店街で展示するという事により、宇治という地域に初めて触れた気がしました。商店街の中に少林寺拳法の道場があるなんて思いませんでしたし、その建物が古い洋館であったことも初めて知りました。文化フェスタの参加は大学で展示ということと違い、多くの制約がありますが、地域と人との関係を

直に体験し、教えられながら活動することは、とてもいい勉強となりました。最後に、今後の活動ですが、資料展示によって大学が保存している資料や情報を知って頂き、地域の方、来場者、学生が、展示資料を通して交流することによって、皆で一緒に地域文化を保存していくという活動は、非常に意義のある活動だと思います。今後も私たちは、あかりプロジェクトで得た経験を下級生に引継ぎ、学内展示だけでなく学外展示にも積極的に参加し、宇治にある大学という位置を生かした、展示活動を行っていきます。以上であかりプロジェクトの発表を終わります。

橋本：

あかりが飛ばないようにね、一生懸命ガムテープを貼って、なんとか間に合わせたことを思い出しますが。次は「うじぞー組」ですね。宇治のお地蔵さんについての発表をしていただきます。ではお願いします。

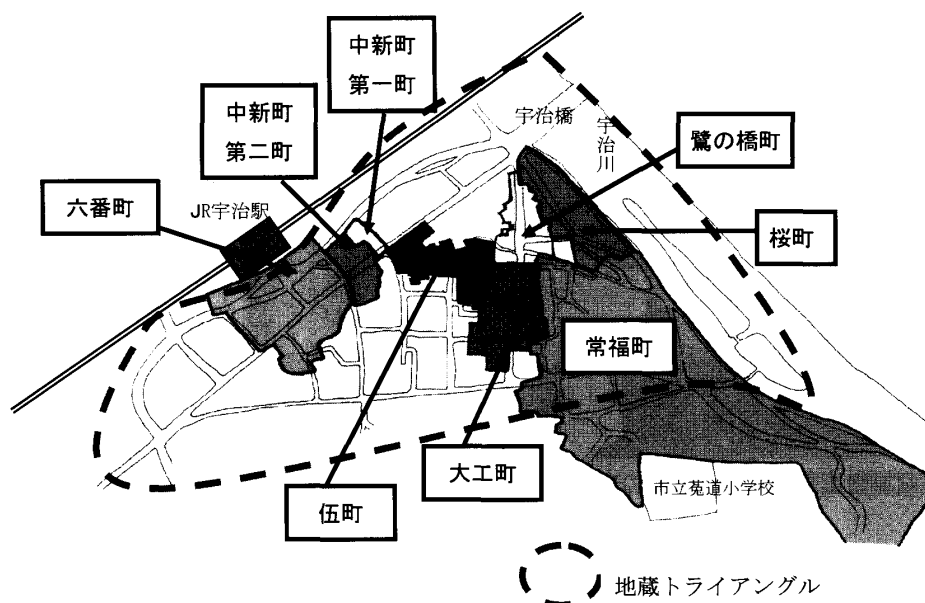
うじぞー組：

それではこれから、京都文教大学うじぞー組の活動について、「地域資源としてのお地蔵さんを考える—うじぞー組2年間のあゆみ」というタイトルで報告を行いたいと思います。

私たち京都文教大学うじぞー組は、地域まるごとミュージアム構想の一環として、中宇治地域のお地蔵さんとそれに関わる人々の暮らしについて、調査研究活動を進めています。今回の報告会では、これまでの活動内容の説明と、宇治橋通りまるごと文化フェスタへの参加報告を行い、最後に今後の展開について述べたいと思います。

まず始めに、私たちがなぜお地蔵さんに注目したかについて述べておきたいと思います。

中宇治地域ではお地蔵さんを様々な場所で見かけることができますが、実際に歩いて見て回ると、そのお地蔵さん1つ1つが違った顔をしていることがわかります。私達はこの特徴のあるお地蔵さんを、その地域にしかない地域資源として発信できるものだと考えました。



資料2-1 中宇治地域町内会（地藏盆調査地域）

私たちはこの中宇治地域に「地藏トライアングル」を設定し（資料2-1）、その中でお地藏さんとそれに関わる人々の暮らしを資料として残す活動を始めました。

実際に、お地藏さんの世話をしておられる方からお話を伺っていく中で、お地藏さんはその地域に住む人々の生活に根ざしたものであり、地域を知る手がかりにもなると考えています。

次にうじぞー組について説明します。うじぞー組には、1回生から4回生までの在学生、また卒業生、外部からの参加者も含めて、30人近いメンバーがいます。お地藏さんやうじぞー組の活動に興味がある人なら、誰でもメンバーとして参加できます。

私たちは、宇治橋通り商店街振興組合を始めとする中宇治地域の皆様にご協力をいただいて、2002年の2月から、お地藏さんを写真に撮って地図に標す作業や、お地藏さんについての聞き取りなどの、基本調査を始めました。そして2003年の8月に地藏盆の調査を行い、10月には宇治橋通りまると文化フェスタに参加して、展示発表と

ワークショップを行いました。今年2004年6月には、2003年の地藏盆の様子を冊子「うじぞー2003」にまとめました。また昨年に引き続いて、地藏盆調査とまると文化フェスタに参加した後、新たに京都文教短期大学・京都文教大学合同の学園祭「指月祭」にも参加しました（資料2-2）。

先ほど挙げた活動の中でも、主な調査活動となっている地藏盆調査について説明します。

地藏盆とは、子供を守ってくれる存在であるお地藏さんを、毎年8月24日頃におまつりし、その周りで子どもたちを遊ばせる行事です。地藏盆は、普段お地藏さんの世話をしている方だけでなく、子供も含め、町内の多くの人がお地藏さんを囲んで集まる行事であり、地域について

2003年	2月	お地藏さんの基本調査開始
2003年	8月22～28日	第1回地藏盆調査 調査地域：常福町・中新町第1町・中新町第2町・六番町
	10月24日	第1回「宇治橋通りまると文化フェスタ」に参加 ①パネル展示 ②ワークショップ
2004年	6月	地藏盆の記録冊子「うじぞー2003」発行 *資料1「暮らしとお地藏さん考察(洛南タイムス2004.8.4)」
	8月19～24日	第2回地藏盆調査 調査地域：伍町・鷺の橋町・桜町・大工町
	10月23日	第2回「宇治橋通りまると文化フェスタ」に参加 ①パネル展示 ②ワークショップ ③スタンプラリー ④いろはカルタ
	11月6・7日	京都文教短期大学・京都文教大学祭「指月祭」に参加 ①パネル展示 ②ワークショップ ③六うじぞー撮影パネル

資料2-2 うじぞー組のこれまでの活動

より理解を深める機会であると考えました。

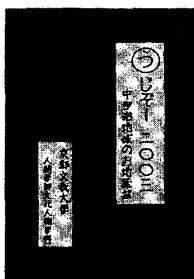
地蔵盆という町内の方が集まる行事に実際に加えて頂いて、地蔵盆が町の人々をつなぐ役割を果たしていると感じました。こちらの写真は、鷲の橋町で聞き取り調査を行っている様子です（資料2-3）。私たちがお話を伺っていると、「うちとこのお地蔵さんにそんな話があったのを、初めて聞いた」と驚かれる方もおられました。

次に、宇治橋通りまると文化フェスタへの参加について述べたいと思います。私達は、宇治橋通りまると文化フェスタに昨年から参加させて頂いています。中宇治地域の地元の商店

中宇治地域の地蔵盆本格研究

「うじぞー」二〇〇三」冊子に発刊

地域の歴史や文化、暮らしと結びにきてがら続かれてきたまちのためのお祭りと、この地を語り通ることに心をこめてきたのが『地蔵盆を記録研究して』である。お祭り・教育学・宇治市横島町「足」人間学部・化人類学・うじそ一班的の研究集大成となる『冊子うじそ』(二〇三)宇治城のお地蔵盆、「写真」が今の地蔵盆を進歩的発展的の「冊子」といふ形に記録、分析したところでは初めと見られ、少子化が進む中で貴重な研究報告になつてゐた。

[illegible]

子、作品に目を凝らさせているところと違ふといふ。」「地域益は、各々かたちをえながら『たまたま』の項の案に『思ひ出』として結び綴がれていくのか、それなれと思つた。」「畠田ひさおさん、な、学生の感想も。」「地域の貴重な文化資源と位置づけられて、地域さん研究を主導してきた教員の森正美さんは、思いやりや温かみ溢れる時間を学生と共有させていたからこそ、としたと、感謝の気持ちと定まれている。A へ判読ページ。

資料 2-5
宇治橋通りまろごと文化フェスタ・ワークショップ風景

街である、宇治橋通り商店街が主催するイベントで、地域の外から訪れる方だけでなく、そこに住んでいらっしゃる方にも地域について知ってもらい、地域内外の交流のきっかけにしてみようと考えました。そこで私たちは、地蔵



資料2-6
ワークショップの
見本
(上：石地藏 下：
フェルト地藏)

マップや地藏盆タイムスケジュールの展示、ワークショップ、スタンプラリー、いろはカルタ募集などの企画を行いました。

展示コーナーでは、地藏マップと地藏盆の中間報告の展示発表を行いました。展示コーナーでは学生が来場者に展示解説を行いました。次に、こちらの写真は、ワークショップの様子です（資料2-5）。展示を見るだけでなく、自分だけのお地藏さんを作ることができるコーナーです。参加した子供たちに、お地藏さんについて周りの大人の方などと話すきっかけにしたいと考えました。昨年好評だった石地藏に加え、今年はフェルトでマスコットの地藏を作ってもらいました。こちらの写真はその見本です（資料2-6）。この他にもお地藏さんぬり絵をしてもらい、出来あがった作品は祭壇型のパネルに貼り出したりもしました。

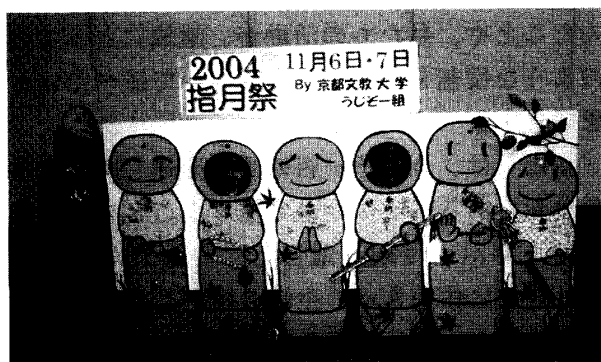
今年新たに加わった企画として、うじぞーいろはカルタとうじぞースタンプラリーがあります。うじぞーいろはカルタは、お地藏さんや宇治橋通り商店街、宇治という地域にちなんだ一句を募集し、いろはカルタを作ろうという企画です。これは昨年地藏盆でお世話になった六番町の方が作っておられた「六番町いろはカルタ」をヒントにした企画です。現在までにたくさんの投稿があり、学内も併せ、100を超える応募作品があがっていますが、これから整理していこうと考えています。

うじぞースタンプラリーは、フェスタに訪れた人に、実際に中宇治地域を歩いて、お地藏さ

んを見て回り、お地藏さんについて語り合う機会を持ってもらおうという企画です。宇治橋通り周辺の6ヶ所のお地藏さんをお参りしながら、スタンプを集めてもらいました。ポイントとなるお地藏さんの前には解説パネルを置き、そのお地藏さんや、お地藏さんを管理している町内の地藏盆について解説をしました。ゴール地点では、インスタントカメラで記念撮影をし、スタンプを全部集めた人には、景品として手作りの缶バッジを渡しました。

この企画には、大人から子どもまで多くの方の参加があり、それぞれのお地藏さんを管理しておられる町内でも好評を頂きました。アンケートでは、スタンプラリーのポイントになった自分の町内のお地藏さんについて知ってもらえたことに対して、お礼を書いて下さる方もありました。

また、学内でも私たちの活動を知ってもらおうと、2004年11月6日・7日に行われた指月祭でも展示とワークショップを行いました。こちら



資料2-7 指月祭・六うじぞー撮影パネル



資料2-8 うじぞー缶バッジ（試作品）

の写真は、「六うじぞー記念撮影パネル」です（資料2-7）。当日このようなパネルを立てて、その場で来場した人の写真を撮影し、プレゼントしたりしました。このようなイベントを通して、様々な方が中宇治地域のお地蔵さんや地蔵盆について知り、お地蔵さんに関心や親しみを持って下さったのではないかと思います。

現在私たちは、今年度の地蔵盆調査の記録をまとめ、冊子『うじぞー2004』を作る準備をしています。また、パネルで展示した地蔵マップを多くの方が手にとれるような形にしたいとも考えています。これと併せて、うじぞー組でオリジナルグッズを作る企画も進めています。こちらの写真は、スタンプラリーの際、景品として配った缶バッジですが（資料2-8）、このようにお地蔵さんをキャラクターにできないかと案を出し合っているところです。また、皆さんから寄せられたうじぞーいろはカルタの応募作品をもとに、うじぞーいろはカルタを完成させたいと考えています。

最後に、このような活動を通じて私たちが学んだことや、私たちの活動が、地域にとってどのような役割を果たせるかについて述べたいと思います。

私たちは、うじぞー組の活動を通して、大学の地元である宇治について様々なことを学びました。宇治には観光地としての魅力だけでなく、そこに住む人々の生活の場としての魅力を感じました。宇治橋通り商店街や中宇治地域に住む人に触れ、私たち自身が感じた魅力を伝えていく試みを、これからも続けていきたいと思っています。地域をつなぐ役割を果たしている地蔵盆を少しずつ記録として残し、イベントやグッズ企画などを通じて、お地蔵さんとそれに関わる人々の暮らしのあたたかさを、少しでも多くの人に知ってもらいたいと思います。

また、このような活動は、地域と大学だけでなく、地域の人々同士の交流や、地域の持つ魅力の再発見にもつながるのではないかと思います。私たちが記録した地蔵盆の冊子や、うじぞースタンプラリーなどを通して、中宇治地域に住んでおられる方が、自分の町やほかの町の

お地蔵さんを、地域の持つ魅力としてとらえ、地域内や、中宇治地域を訪れる人たちとの交流のきっかけにして頂ければと考えています。

私たちうじぞー組が好きな言葉に、「数珠つなぎのご縁」という言葉があります。お地蔵さんについて学んでいく過程で様々な人に出会って、一緒に活動したり、お世話になったりすることで、少しずつ人の輪が広がっていく様子は、本当に地蔵盆の数珠回しの数珠のようです。このような人の輪、「数珠つなぎのご縁」を広げていくことが、中宇治地域のお地蔵さんとそれに関わる人々の暮らしを地域資源として捉え、内外に発信していく手がかりになるのではないのでしょうか。以上で報告を終わります。

橋本：

はい、どうもありがとうございました。キーワードとしては、「地域文化資源」です。すなわち地域文化を文化的な資源として、いかに発掘し、それをみんなが育て、発信するか。色々な地域の人が活動した結果、いましている最中のものも、それも全部、地域文化資源だと捉えています。それとの関わりを、特にそれが人とどう関わっていくかが一番重要な点だと考えております。

これからコメントを頂きたいと思います。宇治谷さんから、前のほうでお願いします。

宇治谷恵：

はい、京都文教大で博物館学と博物館実習の非常勤講師を担当しております、宇治谷と申します。事前に橋本先生から話が長くならないようにと、サジェスションを受けていますので、簡単に話します。

私は、普段は国立民族学博物館で、博物館の展示とか体験コーナーだとか、あるいは社会との連携ということで、ボランティア活動、民博では、ミュージアムパートナーと言いますけども、そういう担当もしております。今回、先生や学生さんから、こういうあかりの展示会を行いたいと聞きました。最初、先生方との話し合いで、博物館実習の一つとして、資料の整理や

実習に使っていたんですけれども。先生が、あるいは学生さんのほうから展示会をするということでした。多少は、私のほうもアイデアを出したんですけれども。ずっと、フォローできない、私も非常勤ということで、土曜日だけだということなんです。大学におればフォローできたのかもしれませんが、ちょっとそこまでできなかった。逆にいうと、アイデアさえ出して、後は自由な発想で、学生さんにやってもらったことが、結果として、まあ色々勉強になったのではないかと思います。ただ、博物館実習の授業とそれほどリンクできなかったのは、今後、どのように改良するかは、私の宿題ですけれども。

いままで、過去の経過をお話したんですけれども、今私の国立民族学博物館なんかでも、学校との連携のひとつとして、「ミンパック」というものを作っています。要は、博物館資料をパック化したものを貸し出すこともやり始めています。もし、この明かりの道具を貸し出して、どこか借りたいところがあるかどうかよくわかりませんが、それも上手に広報すれば利用されると思います。学生さんあるいは先生方と相談して、せっかくだったらこういうものも、「あかりパック」として出前したいですね。よく私たちも出前ミュージアムとか、出前博物館と呼んでいます。まるごとミュージアムの中に、出前ミュージアムもあってもいいんじゃないかなと考えています。次の発展は、せっかくあるものをパック化して、あかりの道具だけでなく、中には映像の資料や解説書があったりして、それを地域や学校などへ貸し出します。

次に、文教大学というところは、私の講義も人類学の人と、少しですけど心理学の方もいます。今、博物館の業界では、「博物館セラピー」という言葉が最近言われつつあります。それは特に、中部地方から関東地方にかけての博物館では、博物館はただ物を見せてるだけや、学んで体験するだけじゃなくて、必ずしも癒しになるかどうかは問題ですけど、やっぱり癒される博物館が重要なキーワードなのです。

今回も、あの展示見てて、あかりというのはひとつの癒しの世界かもしれません。そこには、先ほどのコラボレーションじゃないですけど、従来、博物館というとな、どちらかというと美術とか歴史とか、あるいは民族だけでなく。京都文教大学には心理学の学生さんもありますので、そういう人たちともコラボレーションをしたらもっと面白いものができるのではないかなと、私なりには思ってるんですけれども。今後そういうふうな発展でできればと思います。ただ、坂本先生じゃないですけど、何しろ私のほうも、本気と言うか、一生懸命ですけど。なかなかフォローできないところもあります。長い目で支援したいですね。橋本先生、杉本先生、中村先生も、非常に楽しい先生ですので、楽しみながら将来は協力していきたいなと思います。こういうかたちでせっかく芽が出たものですので、大学ミュージアムの中のひとつの柱となるかもしれません。感想というより、私の文教大学の博物館学のこれからの夢をちょっと語ったみたいで、コメントにはならないと思いますけども、私の感想をお話させて頂きました。どうもありがとうございました。

橋本：

次に振るとあらかじめ申し上げておりましたが、あらためて、宇治橋通り商店街の理事長でいらっしゃる、中西さんにコメントをお願いいたします。例えば学生を引き込もうと思った経緯ですとか、学生を使う時の按配の具合とか、結局学生が、例えば私どもの個性店なんかでは、提案しても、ろくなものが出ないだろうというのはお分かりだと思うんですが、それでもあえて言わせてやろうとかですね。なかなかこう、懐の深いところで学生を迎えて下さっているんですが、そこらあたりのことも含んで、ご感想なり、コメントを頂ければと思います。

中西敏：

皆さんこんばんは。まず、文化フェスタで色々、各セクションの方にご協力頂いたこと

を、この場を借りてお礼申し上げます。有難うございました。

私はずっと今までチェーンストア理論を学んで、100店舗、100億円を目指してやってきましたが、年を取るにつれだんだん面白くなって、結局家業を継いだわけです。その時に「文化」のことをちょっと考えていたんですが、文化の入口は面白いこと、そして面白さは理屈を超えどんどん進み、出口になった時には文化に変わっていくんやと思ったのです。これからの商店街は今までのようにモノを売ることだけではなく交流をもっと大切に考えていく時期に来ているんじゃないかと思っています。商店街のライバルは大資本の各業態（ショッピングセンターやスーパー等）ですから、対抗するには交流すなわちコミュニケーションを大きな武器として戦っていくことが一番です。

いまの世の中たいへん廃れだして来て、向こう三軒両隣とか近所づきあいも段々なくなってきています。これだからこそ商店街にきてもらい、昔のようなおしゃべり、井戸端会議的なものを商店街のなかでやっていけたらいいなと思っています。

だから笑みのでる商店街、笑うという字に変えた「笑店街」づくりを目指している訳です。面白い事とはどんな事かと聞きますと大抵、既成概念に囚われた答えを言う人が多く、読めてしまうので学生さんとか全く知らない人たちに意見をもらったほうが面白い案が出てきます。読めないことがどんどん膨らんで、とんでもない所までいき、それがたまらなく面白いんです、学生さんが絡んでいる「うじぞー」なんかがいい例で、小石や木などいろんな材質のものにお地蔵さんの絵を描いて商品化できるところまで来ています。商品化したら絶対売れると思いますよ、世の中どこに行っても売っていませんから、おまけに「カワイイ」でしょ、女性にとったら「カワイイ」が売れる要素の一番だから。

「お地蔵さん」で、採り上げてもあんまりうるさく言う人もなくやり易く、その点、神さんはちょっと具合悪く、橋姫さんだったらとんで

もないことになってしまいます。親と子、おじいちゃん、おばあちゃんとお孫さんがにっこり笑ったら、ちょうど「笑店街」になるでしょう。最初はお地蔵さんのほかに井戸も考えていたのですが井戸はちょっと怖い方向に行ってもらっては困るので、とりあえずお地蔵さんからにしたのです。

森先生と出会った事も今から考えると不思議な縁だなと思います。先ほども「数珠つなぎのご縁」とありましたけれど私はとても縁を大事にしています。縁が横につながり、広がって想像できない大きさになっていくのです。学生さんと一緒にやっていって中味がどんどん膨らんでいく楽しみを大いに味わわせてもらいました。

私たちはこれからもお手伝いして貰えるようそのお手伝いをするだけで、自由気ままに発想してもらうために大きなフィールドをつくり、この枠を超えると崖になっているよと示すのが役割なんです。「宇治橋通りまるごと文化フェスタ」はスタッフ全員が楽しむ気持ちでやれたので、来られた人もきっと楽しかったはずですよ。当日、お客さまの眼を気にして通りを歩いていて、笑顔と優しい眼の人がいっぱいいたから。それにコミュニケーションの場もあちこちでみられ、お客さまって、正直に反応するものだとつくづく感じさせられました。あかり工房のスタッフの方たちは初めて参加されたのでしんどかったかもしれませんが、気持ちは通じ合えたのではないかと思います。

今回の文化フェスタのやり方は私等にとっても予定外、想定外のことであくまで、みんながお客さまの目線で自然のまま「楽しむ」事を前提にやって来たことが良かったのだと振り返って思いました。お客さまの滞留時間は長く、会話が豊富で、子供たちの声もにぎやかだったり、商売された団体もたくさん売れて喜んでもらえ、こんな嬉しいことはありませんでした。ですからこれからもずっとお付き合い願えるよう頼みます。文教さんは町内会の延長やと思っています。

森正美：

京都文教町内会ですか？（笑い）

中西：

そうそう、気持ち的には同じ町内会に文教さんのほか歴史資料館の人も入っています。暮らしをすごく大事にして催事をやっておられ、私たちと共通する視点を持っておられるのです。今では「生活」を視点にしなければ面白くなく、平等院ほか観光名所はそれはそれでいいんですが、もっと暮らしの歴史、文化を切り口にしたものが色々出てきていいのではないかと考えていますのでこれからもご協力お願いします。

橋本：

あと、10何分があるんですか。この場内のほうから、何かお話があったり、感想があったりしましたら、ぜひとも学生諸君も、コメントなどございましたら、どうぞご発言を。

永野貴子：

先ほど坂本先生のお話を聞かせて頂いて、心にくっつか杭を打ち込んでおりました。と言いますのは、私、文教大学で教職課程を担当しております。また今年のはたまたま博物館実習Ⅱを担当させて頂いております。実は私、史学科を卒業しておりまして、博物館の学芸員資格というのをうんと昔に取りました。その視点ですずっとおりましたので、先ほどの坂本先生のお話が、非常に私には、しみいるものがございました。特に、人間研で「学園ミュージアムを考える」研究会のスタッフの一員なんですけど、もうじき私がそのセミナーを担当しなきゃいけない順番が回って参ります。坂本先生が仰ってましたが、家政学園と昔は言いましたが、100周年を迎えまして、その100周年の年史、いわゆる100周年史を編纂させて頂きました。史学科卒だということで、白羽の矢が立ったわけです。それを終えまして、実は次の計画を立てております。それは、歴史を振り返りながらと、先ほど坂本先生が仰っておられたことを大きな糧にし

て、建学資料館というものを作ろうと思っております。これはもう、法人のほうでもその方向で動いておりますので、学園の建学の資料館を作るにあたって、色んな意味で参考になりました。これからまた、この宇治橋での学生さんの活動も含めまして、いい建学資料館を作りたいなと思っております。また皆さんに色々教えて頂くことがあると思いますけれど、今日はそういう意味で、非常に大きな成果を見させて頂きました。あかり工房の方々は、一緒にちょっと色々とお話をしたことがあったんですけども、今日、うじぞーさんを初めて拝聴致しまして、ああ、いいことをなさっているなあと思って、感心しました。ますます活躍して頂きたいと思います。ありがとうございました。

橋本：

ありがとうございました。何か皆それぞれ、決意表明っていうのかな（笑い）。他にはどんなか、よろしいですか。

じゃあ小林さん、なにか、やっぱり言ってもらえないと。

小林大祐：

今日はありがとうございました。なんか学生さんの元気な活動を見ていると、すごく元気が出てくるんですけど。僕もぶっちゃけ言いますと、6年ぐらい、福知山の商店街で、町ぐるみ博物館をやっているんですけど、だんだんと、6年もやってくると、皆がだれてきまして、なんで我々だけやらなあかんねんや、みたいなことで、行き詰まりを見せているんですけれども。そういう時に、こういう学生さん達の、毎年毎年、再生産されて、新入社員が入ってくるみたいな（笑い）、そういうパワーはすごいな、と。そういうシステムにできひんかなあと、ふと、参考にしたいけど、出来るかなあというふうに、ちょっと思案していたんですけども。

僕は大学院のほうは、今から20年ほど前なんですけど、僕は工学部だったんですよ。建築の歴史をやっておりましたんで、京都国立博物館で非常勤の調査員を5年ほどさせて頂きまし

て、色々と触れないような物をいっぱい触らせてもらったんですけども。その頃の博物館というのは、「スターウォーズ展」なんか絶対やるような博物館ではなかったので、触れるのは裏方で、月曜日の日だけ、休館日だけだったんですけども、そういうのがあって、博物館の定義が変わってきまして、開かれた博物館と言いますか。先ほどのお話のように、気楽で、でも本気で、みたいな、非常に良い動きだなあと思いました。今日寄せてもらったのも、何か身につけられないかなあと考えて、聞かせて頂いてました。今日はどうもありがとうございます。

橋本：

住山さん、何かございましたら。何かあったら、どなたかとか言いながら、逆に指名しているんですが（笑い）。

住山一房：

商店街の副理事の住山です。皆様のおかげで文化フェスタが盛大にできました、ありがとうございます。森先生とのご縁が、この様なことになるとは思ってもみませんでした。商店街の単なるイベントと思っていたんですけども、いい方向に広がっていると思っています。これがますます、もっと広がったらいいなと思います。お地藏さんも、最初は観光協会が行ってる、源氏スタンプラリーのような、お地藏さんスタンプラリーを考えてたんです。単なる、お遊びで。それがこういうお地藏さんの調査研究という、思ってもいなかった方向に発展していった、それもまたいい方向になっているということで、よかったと思っています。ただ、フェスタもだんだんマンネリ化しないようにしていかなければなりませんし、来年のまた企画が大変やなど。盛り上がっただけに、大変やなどと思っています。またご協力、よろしくお願いします。

橋本：

フェスタはどのくらいやってるんですか。文

化フェスタというか。

住山：

「まると文化フェスタ」としては、2回目です。その前が、秋に「おもしろねんで宇治橋通り」というのを、2回する予定でしたが、1回目が雨で中止になりまして、3年前の「おもしろねんで宇治橋通り」という、秋のイベントが最初です。それ以前は、夏のイベントで、ミス・子ども・家族の浴衣コンテストとか、色々な芸能人を呼んで、ショーをやりました。昔からの、よくあるお金をかけたイベントを行っていました。KBSの企画会社に頼んでやってもらうとか、芸能人来てもらうとか、そういうタイプのイベントは10年ぐらい続いています。そうじゃなしに、もう皆さんが今度は参加してもらって、楽しんでもらうというイベントが、秋の「おもしろねんで宇治橋通り」とか「まると文化フェスタ」です。だから、それぞれ皆さんが、参加するタイプのイベントということでさせて頂いています。芸能人に出演料払って来てもらうような、今まで通りのイベントはしないということで。

橋本：

参加する人が金払うとか（笑い）。

住山：

いや、ありがたいですけども（笑い）。いや、本当にイベントするにはお金がかなりかかりますので。その資金集めが一番大変なんです。すみません、またよろしくお願いします。

橋本：

どなたか他に、言い残したことなどは。

中西：

きのう思いついたのですが、「暮らしの歳時記」のように四季折々の昔からの伝統、慣習などをテーマにした「うじぞー歳時記」があってもいいんじゃないかと思ったのです。そうすれば人とお地藏さんとのふれあいの場がもっと増

え、同時に商店街とのふれあいも増えるのではないのでしょうか。おもいつきでしゃべってすいません。

橋本：

どんどん課題を与えて下さい（笑い）。思いもかけず様々な企画がでています。あかりのポストカードも、うじぞーの缶バッジも、実は我々も考えていたのは、携帯ストラップと団子ですね。団子と一緒にすれば結構面白いかなとか。なんとかそれを、これはずっと前から考えてたんですけれども、各お店に、定番として置けないかと考えました。これは別に目玉にならなくてもいいんですよ。来ると必ずある、その宇治橋通り商店街のオリジナルグッズが、500円以下のそういう価格で、どこの店にも置いてあるもの。それをなんとか置けるようになったらいいなというような話です。そのほかにはその商店が作った、自分のお店のオリジナルグッズはもちろんあるわけですね。しかしながら、こういう今回学生が作ったとか、これを機会に何とかしたという、ひとつ別の物語があるわけです。それが、付いてるわけですね。そうするとお店の人が「ちょっと面白いね」とか思って、来てくれた人に、その話ができるわけです。「学生が作ったんですよ」とか言ってますね。こんなことで、面白がって作ってますよ、とか。例えば、文化フェスタでは、こんな地蔵スタンプラリーなんかもやりましてね、という話を、お店の人が品物に一言加えて売る。その一言がたぶん、とても大切なことなんだろうと思います。そういう物が全部の店にあってね、別にこれ商売しようと思ってるわけではなくて（笑い）。そういうのが手軽に置いてある。そして儲けはなくてもいいんですが、もう一度また新しいのが作れるぐらいのお金が返ってきて、そしてそれを元にして、今度はまた、別の形の携帯ストラップでも、お地蔵さん缶バッジでも別の物が出来たり、いろんな物が作れるような資金になって、また新しいアイデアが出てきたら、それをまた作れるように。そういうように循環していくといいな、とか。これ

はずっと思ってることで思いつきではございません。それでは森のほうから。

森正美：

どうもいろんな元凶を作ったのは私かな、という、責任を感じてしまいました。でも本当に、今日はお礼を申し上げたいと思います。今日来て下さっている商店街の方々に対して、日頃から支えて下さっている先生方に対して、歴史資料館の坂本さんにも。

坂本さんは特に、最初は、この人達は何を言ってるんだろう、俺の仕事を増やしに来たのか、という具合に、私たちのことをとても変な集団だと思っていらっしゃったのがとてもよくわかりました。それが、ある時、ふっと坂本さんが、「こういうのもありかなって、ちょっと思ってきた」って仰って下さったことがあって、それは私の中では、学生達が積み上げてきた努力を、ものすごく見守って下さっていて評価して下さいている言葉だな、というふうに思えました。ただその中で、やはり今日、坂本さんが仰っていたような歴史性や地域性という言葉が大きな課題としてあります。『うじぞー2003—中宇治地域のお地蔵盆—』をまとめた時の大きな目標としては、今の記録の作成を目指しました。その試みは非常に人類学的です。つまり、誰も価値を見出さないような、今生きている人々の営みにも価値があるという立場で研究をし、それを記録に残すということは、地元でもかなり高く評価して頂きました。ただしやはりその記録をこれから先に残していく中で、これまでの歴史の中の文脈にきちんと位置付けられてきたものになっているか、とか、他の地域との地蔵盆と比べたらどうなんだとか、そういう視野の広がりや深まりという点は課題として残っているだろうと思うんですね。それはこれからまた、まず私が勉強し、そして学生たちと一緒に勉強しないといけないし、そこでまた教えて頂いて、お願いすることがたくさん出てくるだろうと思います。

一方、商店街のほうは、本当に色々な思いつきを自由に言わせて頂いて、学生達が、なにも

のにも替えられない経験をさせて頂いています。それは、「まるごとミュージアム」と言うか、「まるごと体験商店街」のような感じで、私達をまるごと引き受けて頂いて、わがままも言わせて頂いて、やらせて頂いていて、心から感謝をしています。お互いにこのような愛が（笑）、いつまでも続くように活動をしていけるといいなと思ってます。

最初に商店街の方々と活動で関わらせて頂く時に、私は理事長さんたちに、お金は儲かるとは思わないで下さい、私達は何もそういうことは知らないし、できません。それから、すぐに結果が出ることは私達は得意ではありません、というお話をしました。その代わり、さっき坂本さんが、気楽に、気軽に、でも本気に、と仰ったのにもうひとつ、気長に、というのをぜひ付け加えて、細くでもいいから、長く続くようなものにしていければいいかなというように思っています。一番大変なのは、本当に、活動を中心になってやってくれている学生や卒業生だと、日頃から感謝しているので、その人達にも御礼を言いたいなと思ってマイクを取りました。本当にありがとうございました。

橋本：

本当に学生の皆さん、森の思いつきをですね、これを再現しなきゃいけないって（笑い）、それがストレスになって結局は「六うじぞー」を作ってしまいました。というような先生のわがままを色々聞いてくださってありがとうございます。でも本当に、学生の皆さんのこういう動きがあって初めてここまで来れました。これはひとえに学生の力です。本当に自信を持って下さい。どうもありがとうございました。今日はどうもありがとうございました。後は杉本先生、何かないですか。最後に。

杉本星子：

今日は遅くまで皆様おつきあい頂きまして、本当にありがとうございました。中西さんに「町内会」と言って頂いたことは、本当にありがたいことです。学生達の多くはふるさとから

出てここに来ています。そうして出てきた先で、町内会だと言って下さる場所があるという。本当にうちの学生達は幸せだと思います。ただ町内会には、できのいい子もいるんですが、ときにはちょっと問題児もいたりするもので・・・（笑い）。そこも含めてあたたかく包んで、見守って頂ければ有り難く思います。これからもそんな形で、気長に、楽しく、そして細く長く、よろしく願いいたします。本当に今日は皆さん、ありがとうございました。

橋本：

ありがとうございました。

（了）